

「地域史シンポジウム」開催報告書

佐々木 啓

人文社会科学部では、毎年歴史考古学メジャーの教員が中心となって、「地域史シンポジウム」を開催している。茨城県とその周辺をフィールドに、地域の歴史や文化遺産についての理解を深め、研究成果を広く社会に向けて発信していくのがその趣旨である。第14回目となる今年度は、「茨城における戦争の記憶とその継承」と題して、茨城県内の戦争遺跡、展示施設、記念碑など、戦争体験の継承のための様々な活動に光を当て、それら一つひとつの実践について紹介・検討するとともに、今あの戦争の何をどのようにとらえ、伝えていくべきか、議論を深めることとなった。

例年この活動には、教員のみならず多くの学生が企画・運営に携わり、地域史について学習を深めるとともに、シンポジウムの基本的な運営方法について学んでいる。本年も2年生から4年生、および大学院生を含めて、合計82名の学生が参加し、運営を担った。

事前準備の過程では、学生たちは各地への宣伝物の発送作業や、レジュメの帳合作業などを行ったほか、事前のガイダンスで当日の役割分担について、その詳細を話し合った。

当日は、学生たちは主に駐車場誘導班、学内誘導班、受付班、会場班の、4つの班に分かれ、それぞれの場でシンポジウムの準備を進め、円滑な進行を支えた。駐車場誘導班は、自動車で来た参加者の会場への案内を行い、学内誘導班は、学内の各所に立って、会場への誘導を行った。受付班は、資料の配布や記帳などを担当し、会場班は、場内の清掃や設営、マイクなどの機材のチェックなどを行った。また、今年度については、日本近現代史ゼミが研究報告を担当することになっていたため、同ゼミの16名の学生が、その準備から当日の発表まで、関連する作業をすべて行った。

当日は、晴天に恵まれ、235名の参加者にお越しいただくことができた。朝9時半に集合して17時半に解散するという長丁場となったが、準備から後片付けに至るまで、学生たちはしっかりと向き合い、大きな問題もなく、各自の持ち場でしっかりとシンポの運営を支えた。

歴史を通して社会と触れ合う一つの方法が、こうした大規模な学術シンポジウムであるとするならば、学生たちはその運営方法の一端について、実践を通して学ぶことが出来たのではないかと思う。今後、ここで得た経験を活かして、さらに歴史・考古学メジャーでの学びを深めていってくれることを期待している。

最後になりましたが、後援会からの多大な支援を頂きました。心よりお礼申し上げます。

